【ねがいましては】

令和５年１月３日　　*KYOWA SCHOOL*

第３８４号

「音読宿題の危険」

小学校へ上がり、ピカピカの一年生。やがて宿題が出るようになります。国語では「音読」です。読んだことを確認する親のサインをもらってきます。その際のお父さんお母さんの音読の聞きとり方です。当たり前かもしれませんが、つまずくことなくスラスラと読めていれば「OK」だと思います。食器洗いなどをしながら背中で聞いているお母さんもいらっしゃるかもしれません。

ここで大切なこと、スラスラだけでは危険が生じることです。それは、『意味を理解せずに読んでいるだけ』という現象です。本来、『読む』という行為の基本は、何が書いてあったかを理解することにあります。

ですからスラスラと読んだだけでOKが出てしまうと「なんだこれでいいんだ」となり、読んだ中に知らないことばがあったとしても聞かずに終わってしまいます。それが常態化してしまうと危険なことになります。子にとって、国語は『読めればよい』だけの世界になります。やがてテスト、その後の親子関係はご想像にお任せします。

また、次のようなことも大きな要因になります。学校での国語の授業、先生より席の先頭の子から教科書の本文を読むように指名されます。「はい〇〇さん、次の〇〇まで読んでください」「はい、次は後ろの〇〇さん、〇〇まで読んでください」といったような前から順番に音読をする授業です。お読みいただいている方々にも思い出があると思います。

これ、『読み』に自信がない方、結構心臓がバクバクされたこと、記憶にありませんか。「失敗したらどうしよう」「つっかえたらどうしよう」その場面だけが頭をよぎり、やがて自分の番、結局読み終えたのですが、結論、何が書いてあったのか全く頭の中に残っていなかった、です。しかし授業は続きます。やがて無事事無きを得、その授業は終了。無事終わればこっちのものです。その後の同様な授業も、その手で過ごしていくことになります。つまり常態化します。その後、テストで何があったのか、そして親子間で何があったのかは、ご想像にお任せいたします。

このような例でわかること、子はけっしてサボってもいないし、悪いこともしていないということです。むしろ真剣そのもの、必死の思いで学校生活を送っています。教師はつねにその子を見極める必要があるということです。どのよう気持ちでいるのか・・・。これは普段お子さんと接しているお母さんやお父さんにも同様、言えることだと思います。お子さんがたった今どのような心理にあるのか、それにあわせて濃やかに接し方を考え行動をとることです。そうしないと先ほどのようなことになります。読んでもまったく意味を理解していない・・・です。

ここで重要なこととして、灰谷健次郎さんが本に記しています。『灰谷健次郎の発言〈4〉』優子の涙の中に、園田先生（某小学校教員）が、自分のクラスの江島くん（1年生）という「障害児」が起こした物語です。江島くんは普段、耳が痛くても鼻が痛くても自分でうまく表現することができません。彼が耳鼻科の健診の際、おびえて泣き出してしまいます。そのわけは、江島くんが天井にある扇風機を見上げて得意になっていた時、お医者さんは江島くんの腕をつかんで自分の前へ引き寄せてしまったのです。すると江島くんは激しく泣き始めました。結局『泣く子は診られない』と、お医者さんは言いました。園田先生は書いています。「江島くんは泣いたンとちがう。お医者さん、アンタが泣かしたンや」・・・。これを読み、灰谷さんは自分自身と重なったと書いています。

また後日、似たような事件が起こります。入学記念の写真を撮ることになり写真屋さんがストロボをたいたところ、それに驚いた江島くんは、また激しく泣き出しその場を立ってしまいます。写真屋さんは江島くんのところに駆けてきてしゃがみこみ何やら話を始めます。やがて機嫌を直した江島くんはみんなのところに戻ります。すると誰かがいい出して、みんなで肩を組んで映してもらったということです。

そこで灰谷さんは学んでいます。『集団の中でこそ個が生かされねばならない』つまり、『クラスをひとつのかたまりと見てはならない。その中のひとつひとつにある個性をしっかりと見つめることこそが大切である。教育の中に、人間の生命をマスとしてみる視点を持ち込まない。あらゆる教育の成り立ちは一対一の生命の激しい向き合いであるという思想である』と、結論付けています。そして『教育の中には「教える」「導く」「しつける」などということばがある。わたしたちがいうところの良心的な教師は、教育の中に側面があることを認めつつも、なるたけ、そのことばを使うまいとする。その意識を持つまいとする。「教える」「導く」「しつける」側に立ってみれば、これらのことばは何と冷たいものだろう。』

私はこの文を読み、この３つは動物への調教だと感じました。このことは学校現場で活躍される先生方にも当然お読みいただきたいことなのですが、同様にお父さんやお母さんにも当てはまることだと感じました。この３つに共通しているものは『命令』です。『～しなさい』が裏側に潜んでいます。『～のように育てるのだ』という利己的な考えのみになっています。

当然ご両親は我が子に〇〇のように育ってほしいという希望を抱きます。それはお子さんが生まれた瞬間のたった一つの思いだけでよいと思います。『どうか健康に育ってください』だけです。あとは『わがまま』だと思っていただきたいのです。「おかあさんごめん、今日さ、テストで〇〇点とっちゃった、ごめんね」・・・どうですか、健康でしょ！